男と悪魔

家根川　颯馬

その男の夢は、子どもの頃から一つ。悪魔を呼び出すことだけだった。
悪魔は、人の願いを三つだけ、どんな願いでも叶えてくれる。そしてその代わりに、その人物の死後、魂を奪いにくるのだという。
その話を聞いて、男は悪魔のとりこになった。いつかそれを呼び出してやろう、と決意したのだ。それから男は、子どもの頃は近所の図書館で、悪魔が登場する絵本やファンタジーを漁り、大人になると世界中の悪魔に関する文献を取り寄せて、悪魔の研究を続けた。
長い年月を経て、彼はついに悪魔を呼び出す方法を独自に編み出した。そして、それを試したところ、見事に成功したのである。
現れた悪魔は彼に言った。「さあ、三つの願いを言え」
しかし、彼は答えに詰まる。「……私は悪魔を召喚することばかり考えて、お前に願うべきことを考えていなかった。どうすればいいだろう」
悪魔にとってもそれは想定外の出来事らしかった。「ちょ、ちょっと待ってくれ、それじゃ困るんだ。願いを叶えないと、死後にあんたの魂を連れていけない。無理にでもきめてくれ」と口調が乱れる悪魔。
「例えば、悪魔を召喚するというのはどうだ？」男が訊いた。
「もう呼んでるじゃないか。もっと別の頼みはないのか。もちろん、不老不死であるとか、願いの数を増やしてくれというようなものは無理だが、それ以外なら大抵は叶えてやるさ」
そう言われ、男はしばらく考えた。はて、どんな願いがいいだろうか。自分の人生は悪魔を呼び出すためにあったようなものだし、今までの生き方に悔いはない。しかし、これからしたいこともない。ああそうだ。これからすべきことをもらおう。「では、私に生きがいを与えてくれ」
「生きがい？　そんなことを言うやつは初めてだが、まあいいさ。やろう。で、二つ目の願いは？」悪魔が言った。
もう一度男は願いを考えたが、どうしても出てこない。何を願おう。
ずっと考えているうちに、男はいらいらしてきた。目的はもう果たして、新たな生きがいも得たというのに、どうして悪魔にこうも時間を取られなければならないのだ。だいたいこの悪魔、まったくもって悪魔らしくない。威厳が感じられぬ。こんなやつにかまっている暇はないのだ。
「願いを決めたぞ」と男は言った。「――お前、もう帰れ」